昭和54年度の愛媛県における MCLS 症例の多発と患者対照比較研究

日赤医療センター小児科　川　崎　富　作
国立公衆衛生院疫学部　重　松　逸　造
柴　田　茂　男
五　城　英　彦
愛媛県立衛生研究所　曽　田　研　二
森　　正　俊

①はじめに

昭和54年度は特にその前半に全国的な MCLS の多発をみたが，われわれは愛媛県でその実態調査を行ったので，その成績を略記する。

②月別発生状況をみるに図1の如く，

昭和53年12月より急速に増加し，昭和54年2月にピークに達し，以降急速に減じて，6月以降は例年並みとなった。

③患者発生数と発生率をみると表1に示す如く，

昭和53年度は総数58例であったが，昭和54年度は8月末までの8ヵ月間で183例と約3倍の症例が経験された。9才以下の人口10万対発生率をみると，全国平均が18.2人なのに対し，愛媛県では昭和53年が25.2人とやや平均

表 1　MCLS 患者発生数と発生率（愛媛）

	発生数（人）		9才以下人口10万対発生率[1]	
	'78	'79[2]	'78	'79[2]
東　予	38	55	43.7	63.2
中　予	16	78	18.1	88.4
南　予	4	50	7.3	91.0
愛媛県計	58	183	25.2	79.5
全国調査（'77—'78）の年平均発生率 18.2				

1）75年国勢調査人口による
2）8月末まで

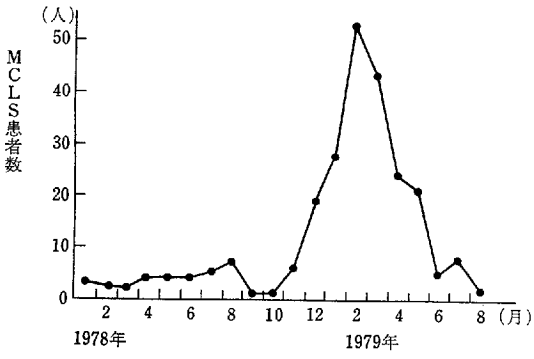

図 1　MCLS 月別発生状況（愛媛県）
(78・1—79・8)

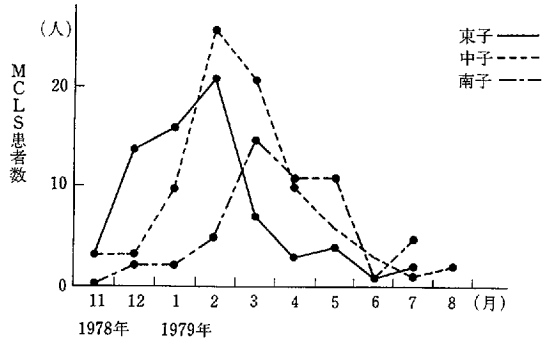

図 2　MCLS 地域別月別発生状況（愛媛）
(78・1—79・8)

表 2 case-control study 結果（抜粋）

	MCLS (n=137)		対照 (n=137)	
53年11月以降の疾病への罹患				
突発性発疹	14	10.2%	16	11.7%
本人の罹患傾向				
*かぜ	51	37.2	28	20.4
アフタ性口内炎	3	2.2	9	6.6
アレルギー性鼻炎	11	8.0	10	7.3
頸部リンパ節腫脹	2	1.5	2	1.5
結膜炎	7	5.1	5	3.6
同胞の罹患傾向				
かぜ	33	24.1	27	19.7
アフタ性口内炎	4	2.9	6	4.4
アレルギー性鼻炎	15	10.9	15	10.9
結膜炎	6	4.4	3	2.2
両親の罹患傾向				
扁桃炎・咽頭炎	24	17.5	30	21.9
口内炎	10	7.3	10	7.3
湿疹じんま疹	15	10.9	15	10.9
アレルギー性鼻炎	10	7.3	16	11.7
ヘルペス	2	1.5	1	0.7
結膜炎	1	0.7	0	
母親の罹患傾向				
扁桃炎・咽頭炎	13	9.5	18	13.1
口内炎	8	5.8	8	5.8
湿疹・じんま疹	11	8.0	4	2.9
アレルギー性鼻炎	8	5.8	12	8.8
	1	0.7	1	0.7
結膜炎	1	0.7	0	0
薬の使用				
*解熱剤よく使用（月１回位）	31	22.6	13	9.5
しない・ほとんど使用せず	101	73.7	122	89.1

*X^2: $p<0.005$

を上回っていたが，昭和54年は79.5人と全国平均を４倍以上も上回っていた。

④地域別月別発生状況をみると図２の如く，

昭和53年12月に東予より多発しはじめ，昭和54年２，３月に中予でピークに達し，南予が３，４，５月と遅れてピークとなった。

⑤患者対照比較研究については，

表２に示すように，多数の項目につきアンケート調査を行ったところ，本人の罹患傾向で，カゼが対照の20.4%に対し，37.2%と高く，また薬の使用状況で，解熱剤をよく使用するが，対照の9.5%に対し，本人の22.6%と高かった。

結　論

昭和54年度の前半は愛媛県でも MCLS 患者の多発がみられた。地理的分布と時期的関係で，東予よりはじまり，中予を経て，南予に及ぶという，従来愛媛県におけるインフルエンザなどの流行と同じパターンがみられた。本人とカゼ罹患傾向と相まって，愛媛県の今回の流行では，ウイルス感染が本症発生に何らかの関係を示唆するデータであった。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

①はじめに

昭和54年度は特にその前半に全国的なMCLSの多発をみたが,われわれは愛媛県でその実態調査を行ったので,その成績を略記する。